

災害ボランティア活動に関することは
最寄りの市町社会福祉協議会等にご連絡ください



義援金やボランティア活動資金への募金も
大切なボランティア活動です。

【滋賀県共同募金会】
<http://www.shiga-akaihane.org/>

【日本赤十字社滋賀県支部】
<http://www.ex.biwa.ne.jp/~rc-shiga/>

発行：滋賀県災害ボランティア活動連絡会

平成21年(2009年)3月

淡海フィランスロピネット／淡海文化振興財団(淡海ネットワークセンター)／滋賀県共同募金会／滋賀県市町社会福祉協議会会長会
滋賀県社会福祉協議会／滋賀県生活協同組合連合会／滋賀県労働者福祉協議会／日本青年会議所近畿地区滋賀ブロック協議会
日本赤十字社滋賀県支部／滋賀県(防災危機管理局・県民活動課・健康福祉政策課)

事務局：社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

TEL.077-567-3920 FAX.077-567-3923

災害ボランティア 活動ハンドブック

多様性

さまざまな
救援活動に対応!

柔軟性

その場の状況に
柔軟に対応!



ボランティアセンター



個別性

被災者の
状況に応じた対応!



滋賀県災害ボランティア活動連絡会

このハンドブックは共同募金配分金を活用して作成しています

災害ボランティア活動ハンドブック

はじめに

阪神・淡路大震災以降、地震や風水害の発生時には、多数のボランティアが被災者支援活動に参加し、被災地の復旧・復興に寄与してきました。もはや、災害救援にボランティアは、不可欠な存在となっています。

しかし、滋賀県においては、幸いにも過去数十年間、大規模災害が起きていないため、災害に対する意識ならびに災害ボランティア活動に関する理解が十分とはいえない状況です。

このため、このハンドブックは、地震や風水害が発生した際に、被災地において行われる「災害ボランティア活動」について、県民の皆さんに知っていただき、災害ボランティア活動に対する理解と活動への参加が促進されることを願って作成しました。

目次

災害発生時の救援活動	2
災害ボランティアとは	
活動の担い手	3
活動時期・内容	4
活動にあたって大切なこと	5
● 共感 ● 被災者本位・被災地主体 ● 自己完結	
地元ならではの災害ボランティア活動	8
災害ボランティアセンターとは	9
● 災害ボランティアセンターの機能	
● 災害ボランティアセンターの運営	
● 災害ボランティア活動のながれ	

災害発生時の救援活動

大規模災害が発生した場合、下記の活動主体による各種の救援活動が行われます。

救援活動の中心は行政ですが、被災地の住民同士の助け合いやボランティアによる支援も被災地の復興に大きな力となっています。行政・被災地住民・ボランティアは、それぞれの役割や特性を認識し、相互の連携を図りながら活動していくことが求められています。

行政 同時、大量

災害救助法等法令に基づく活動

「緊急救援物資の調達など同時に大量の救助支援」

- 発生直後の救急・救命
- ライフラインの復旧
- 緊急救援物資の調達など



被災地住民 安心感、信頼感

住民同士の助け合い活動

「安心と信頼感のある顔なじみ同士の助け合い」

- 発生直後の救出や避難
- 被災者の相談相手
- 被災者に対する声かけなど



ボランティア 多様性、個別性、柔軟性

ボランティアの自発性に基づく活動

「被災者の状況に応じた様々な活動を柔軟に対応」

- 避難所運営手伝い
- 被災者の話し相手
- 屋内外の片づけ手伝いなど

災害ボランティアとは

地震や風水害など自然災害が発生した場合、多くの人命・財産が失われるとともに、自らの力だけでは、解決できない生活課題を抱え、支援を必要とする被災者が生じます。

このような被災地において、生活（地域）の復旧・復興に向けた様々な活動を被災地の住民と協力して行う人を「災害ボランティア」と言います。

活動の担い手

災害ボランティアは、大きく分けると①被災地（地元）のボランティア個人と団体②被災地外のボランティアと災害支援NPO等があり、①と②では、必要とされる時期や活動内容が異なります。



活動時期・内容

災害時のボランティア活動は、緊急対応、復旧、復興の時期に分けられ、時間の経過に応じて活動の主体や内容が変化します。

経過	ボランティア活動に関連する被災地の動き	想定されるボランティア活動
緊急対応 災害発生から2～3日後	地元ボランティアによる活動が開始される ○避難所の開設 ○災害ボランティアセンターの開設	<ul style="list-style-type: none"> ●避難所の開設手伝い ●災害ボランティアセンターの運営支援
復旧期 水害時：2～3週間後 震災時：2～3か月後	被災地外ボランティアの活動がピークに ○避難所の本格運営および自宅への帰宅が進む ○被災者の個々の生活課題が明確に	<ul style="list-style-type: none"> ●避難所の運営手伝い ●物資調達、運搬、仕分け手伝い ●屋内外の片づけ、引っ越し手伝い ●被災者の話し相手 ●被災者ニーズの把握・掘り起こし
復興期 震災時：3か月～3年～復興まで	地元住民・ボランティアによる活動へ移行 ○仮設住宅の開設 ○災害ボランティアセンターの閉鎖	<ul style="list-style-type: none"> ●要援助者の日常生活の支援 ●被災者の相談相手 ●被災地のつながりづくり・まちづくり活動の支援

上記のように、災害時のボランティア活動は、土砂撤去や家具等の搬出などの力仕事や避難所の運営手伝いのみならず、被災者の話し相手になったり、要援助者に対する日常生活上の支援のほか、子どもと一緒に学習することや遊ぶことならびに被災地内の道案内や各種支援情報に関する広報誌づくりなど、各ボランティアの年齢、性別および特技等を活かした活動が行われています。

なお、義援金やボランティア活動資金への募金も大切な活動です。



※医師、看護師、建物等応急危険度判定士、外国語通訳、特殊車両運転など、専門的な知識や技能を活かした業務を行う「専門ボランティア」による人命の救助・救護、ライフラインの復旧、外国語通訳などの活動も行われています。

活動にあたって大切なこと

災害ボランティア活動は、被災者とボランティアの共通理解・共感・励まし合いを基本として、「被災者の自立に向けた支援」と「被災地住民によるまちの復興を支援」する活動です。

共感し寄り添う気持ちで接しましょう！

被災者は、人それぞれの思いがあり、「被災者」という名のもと、ひとくくりに対応されることに抵抗を感じる人もいます。どのような状況でも、相手の気持ちを大切に、尊重する気持ちを持って接する必要があります。

共感

被災者と同じ立場にはなれない。けれど気持ちだけは理解し「寄り添って」という気持ちを持って接する。

被災者の置かれている状況や気持ちを感じ取り、知り、聞き取る。

「共にあること」を基本にした活動。自分の判断や思いを押しつけないようにする。

事例

足湯ボランティア

1

～中越・KOBÉ
足湯プロジェクトの活動～

足湯とは、バケツにお湯を入れて15分程度足を暖めるものですが、不思議な力があります。体が暖まることと心が癒されるのです。足湯の間にボランティアとの会話(こころ)を交わす中で、被災者がふと心情をもらすことがあります。

このような、声なき声(つぶやき)は、足湯による心身のリフレッシュとボランティアの被災者に寄り添う姿勢があっただけで聴き取れるのです。



被災者本位・被災地主体のサポート姿勢が必要！

災害時のボランティア活動は、「被災者が生活を再建」し、「被災地が復興」しようとする「地域の力を支援」することです。このため、活動においては、「～してあげる」ではなく、「被災者・被災地による活動を共に行う」という姿勢が必要です。

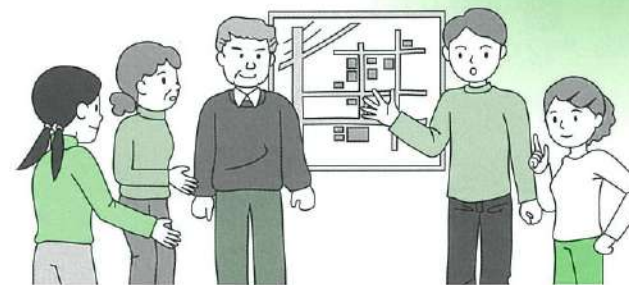


復旧や復興の主役は、被災者・被災地である。ボランティアは、それをサポートする存在。

被災者本位 被災地主体

被災者が何を最も必要としているのかを常に考えて行動する。

被災者同士の円滑なコミュニケーションが図れるよう側面から支援する。



災害が被災者のところにもたらすもの

災害に襲われた恐怖、肉親や家屋等の財産を喪失したショックなどにより、睡眠障害、不安感、生き残ったことへの罪悪感、社会からの孤立などを感じています。

これらの感情は、異常な事態に対する「正常な反応」であり、無理に押さえ込むのではなく、上手に吐き出すことが大切です。

ボランティア活動にあたっては、被災者のこのような心情を理解する必要があります。

※NPO法人レスキューストックヤードHP【災害時の心のケア】参照
URL <http://www.rsy-nagoya.com>

活動にあたって大切なこと

自己完結に努めましょう！

災害時にボランティア活動を行おうとする場合、現地の被災状況とボランティアの募集状況を確認の上、現地入りは、原則として、公共交通機関を利用しましょう。また、活動に必要な携行品の調達や食事・宿泊の確保は、自分で手配(自己負担)することが必要です。



活動に際して準備すべきもの 3日分程度

服装	動きやすい服装(防寒と通気性の良い素材のもの・作業しやすいズボン) 着替えの下着、帽子、底の厚い靴、軍手
携行品	マスク、カッパ等の雨具、水筒、ゴミ袋、携帯ラジオ、 タオル、保険証写、地図、筆記用具、 活動資金(宿泊費・保険料等)、携帯電話
食料品	飲料水、食料
生活品	洗面具、救急キット、ティッシュ

災害の種類、気候、活動内容により追加品が必要です

地元ならではの災害ボランティア活動

「知らない人が家に入るのには抵抗がある」「手伝いは、お願いしたいけれど、本当に依頼してもいいの?」と、「自らの思い」や「我慢して自ら助けて」と言い出せない人がいます。

こんな時、顔なじみで信頼できる人からの「頼んでいいんだよ」という働きかけの一言は、SO Sを出せない被災者への声かけや見守り、共感に基づく相談対応(傾聴)など、被災地(地元)の習慣・ことば・地理などを知っている地元の人にしか出来ない活動です。



事例 2 地元ボランティアグループの取組

～能登半島地震 穴水町「グループ325」による訪問活動～

グループ325の活動は、地元穴水町のボランティア有志が、被災者の心のケアを目的に避難所を訪問したことが契機で始まりました。

避難所では、お年寄りや子どもを中心に、世間話や生活の不安や不満を聴き、その声を災害ボランティア本部(社会福祉協議会)を通し、町行政に届けました。この活動により、避難所の生活環境は少しずつ改善されるとともに、訪問が認知されるようになりました。

被災者の生活拠点が仮設住宅へ移行してからも、仮設住宅の談話室を定期的に訪問し、気づいたことを町社協に届けました。

これらの継続的な訪問により、同談話室は、仮設住宅のコミュニケーションの場になるとともに、地域復興の活動拠点となりました。



災害ボランティアセンターとは

災害ボランティアセンターは、「被災者を支援したいボランティアのニーズ(思い)」と「支援を受けたい被災者のニーズ(困りごと)」の窓口となり、双方の思いを「調整し・つなぐ」役割があります。

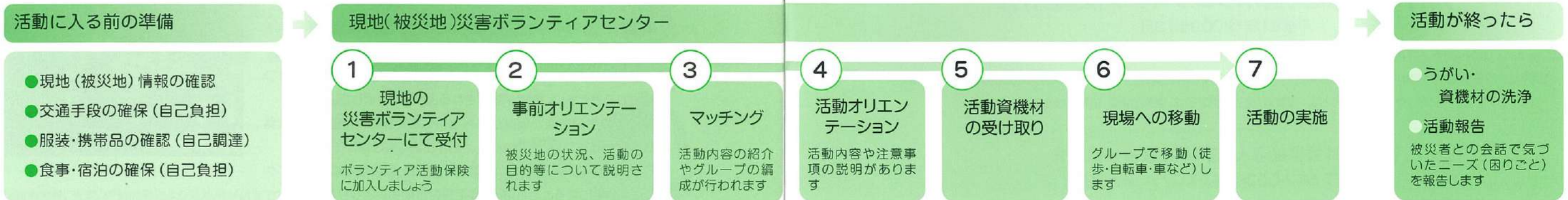
また、SOSを出しにくい被災者などのニーズの把握に努め、その解決を図るための役割を担っています。

災害ボランティアセンターの機能

- ボランティアの総合案内、受け入れ、相談
- 被災者からの困りごとの相談
- 被災者の困りごとを地元と協力して把握、集約
- 必要とされる活動(プログラム)の企画・開発
- 被災者とボランティア双方の思いの調整
- 支援を受けたい被災者にボランティアを派遣
- 活動に必要な人・物資・資金の調達と管理
- 関係機関や団体との連絡調整
- ボランティア関係情報の収集と発信
- 中長期的な被災者支援と復興に向けたプラン作成



災害ボランティア活動のながれ



災害ボランティアセンターの運営

災害ボランティアセンターが、被災者にとって相談しやすく、必要とされるボランティア活動を円滑に行うためには、被災地の住民・団体・事業所等の参画と協働が不可欠です。

また、ボランティアによる支援活動を地域社会による支援活動に移行させ、被災者・被災地が自ら復興していく力を創っていくためにも、開設当初から被災地の関係者が運営の主体となり、被災地のボランティア等がこれを支援する体制づくりが必要とされています。

センター運営に関与してほしい地域資源(組織・人材)と期待される活動

